

良識ある保守主義・情報公開

吉田つとむ

町田市議会議員 (4期連続トップ当選)

〒194-0011 町田市
成瀬が丘 1-14-12
サンホワイト E103-13
☎ 042-795-7361 (FAX: 必
要に応じて186を頭に加える)
議会 042-724-2171
yoshidaben@gmail.com



予算可決の付帯意見に反対討論

第1定例会本会議の最終日、予算成立後に動議で提出された、予算の執行にあたっての付帯意見の内容に反対の立場から討論を行いました。結論ではこの付帯意見は否決でした。



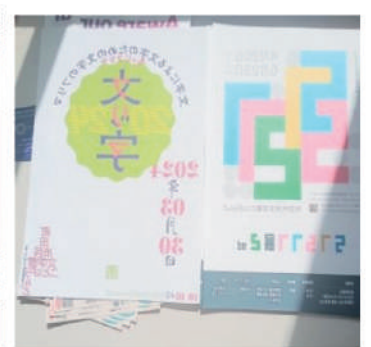
私たちはこの予算案に修正案を提出した(無所属会派)のですが、その修正案に反対し、原案に反対した複数の人(いわゆる民主党系会派)から提出された付帯意見ですが、「関係住民と話し合いが十分にできていない、市内業者が中心になって工事がなされるべきで、それができるまで予算の執行を留めるべきだ」という主張でした。ただし、行政の議会での答弁では「住民の声を聞いている」というものであり、また、工事の入札に市内業者で手をあげるものは無く、参加基準を拡大して大手建設会社のみでも可としても、再三入札が不調になってきたものでした。

とするならば、様々の市民の声を、行政への要望とした付帯決議として、議会が決定することに果たして、どのような意義があるのでしょうか。これでは、行政を拘束する手段にならず、むしろ、反対派(請願者)へのパフォーマンスと言うことに過ぎないという、反対討論を行いました。(続く)

文学館の「文ッ字」フリマ企画

1日だけの企画、文ッ字フリマを開いた「町田市民文学館ことばらんど」を紹介します。「文字による文字のための文字のフリマ」と言うのが、この文ッ字フリマの特徴を表しているのでしょうか。出品者は全部で54組でした。大半はデザイナーと思しき人で、中には絵本作家の方もいました。直感的な評価では、文字デザイナーと言うのでしょうか、あるいは職人的なデザイナーと言うのでしょうか、これらの出品者にはそれぞれのファン(愛好者)があるようで、私が見学した前後にもぞくぞく町田駅方面からこの「町田市民文学館ことばらんど」に人が詰めかけていました。その日の入場数は、この施設で開設後一番の動員力を示したのではないのでしょうか。しかも来訪者は町田市内に限らず、関東圏全域に及んでいるようでした。

作品では、「フォントかるた」が面白い商品でした。一般のかるたでは上の句を読み上げ、床に置かれた下の句を拾い出すものですが、この「フォントかるた」ではフォント(書体)を読み、さらにその説明を読み上げると、それにあったフォントで記したかるたを拾い上げる形を取ったものでしたが、それを競技大会として、町田市で開催する方法にも拡大される可能性を持っていると考えました。



○支持政党なしの方々の代表=吉田つとむの基本理念は、良識ある保守主義です。

○吉田つとむは、「若者育成」をトップの政策に掲げています。

◎町田市内企業が開発した「水耕栽培メロンの世界一決定戦」を開催しよう!

●吉田つとむは令和4年2月実施の市議会議員選挙で、4期連続のトップ当選を果たしました

若い世代の育成に全力をささげる
町田市議会議員(4期連続トップ当選)

吉田つとむ



ブログ 個人HP



メールは
左記を読込
して送信



好評インターンシップは、
夏季休暇期間中の募集開始

インターン体験記①-1 佐々木 瑛

小学校のデジタル教科書の進展動向を学ぶ

教科書会社を訪問し、小学校のデジタル教科書を見せて頂きました。デジタル教科書とは、教科書の内容がそのまま ICT 端末に映し出されているものです。私が学んだデジタル教科書のメリットを二つ、ここで紹介します。



まず1つ目は誰もが読める教科書になることです。デジタル教科書を用いることで、画面の色を反転する、読み上げ機能を使う、文字の大きさを変えるなどの、教科書を自分なりのわかりやすい形に変えることができます。2つ目は先生が生徒の回答を集め個々の答えを1度に見ることが出来ることです。これにより、生徒一人一人の出来具合を効率的に見ることが可能になります。そのため、教師が子供の実力をより把握しやすくなります。

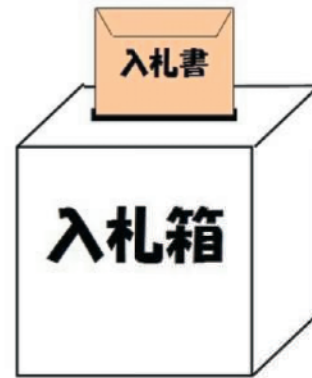
しかし、デジタル教科書には課題もあります。1つ挙げるなら ICT 端末を用いて教育を受けていない教師が、ICT 機器を使って上手く授業をする事の難しさがあります。教員が最新技術を迅速に使いこなし、学びの効率化を促進させるためにも、教員向けの ICT 機器活用の方法を学ぶ機会が今後さらに増えて欲しいと感じました。

東京学芸大学2年生 佐々木 瑛 (第53期生)

官庁の発注物の入札と受注業務

以下は、政令指定都市に住み、そこで営業職を務めていた時代の体験談の記述です。官庁の出先機関の発注業務などにおいて、「相見積もり」という方法で、当初の1社が受注する方法がありました。契約金額が特に低額な印刷物の入札でその方法が取られていました。*なお、本来の「相見積もり」のありかたは、複数の業者の見積もりをそろえて、落札者を決定するものです。なお、当時の本庁発注業務においても似たケースがまれにあったようでした。それがどういうものかと言え、急な発注となり、その納入に日限が限られるものでは、特命的に特定企業が入札照会を受け、その印刷物の受注と納期の約束を交わすものでした。他の業者はその発注が行われたことすら気づかない間に進行するものでした。そうした場合も、「相見積もり」の形式が整えられるものか、それとも不要とされていたかは自分の体験の中では見聞きしたものがありませんでした。

もとより、それらの会社が公取引で長い信頼関係を持ち、かつ、不当な契約価格で契約したり、あるいは不良品や欠陥品を納めるようなことは無かったことが前提でした。



発注機関に赴き、紙により行っていた入札がインターネットを利用して変化しています。ベースは変化してないものもあるでしょう。(イメー
ジのイラスト…ウキペディア利用)

◎吉田つとむのインターンシップは1998年に開始、2024年4月末までに106名が参加しました。

◎インターン生に政治活動の参加は一切求めず、あくまで社会勉強・見学のメニューです。